殺神記

田中貢太郎

唐の開元年中、郭元振（かくげんしん）は晋（しん）の国を出て汾（ふん）の方へ往った。彼は書剣を負うて遊学する曠達（こうたつ）な少年であった。某日（あるひ）、宿を取り損ねて日が暮れてしまった。星が斑（まばら）に光っていた。路のむこうには真黒な峰が重なり重なりしていた。路は渓川（たにがわ）に沿うていた。遥か下の地の底のような処で水の音が聞えていた。鳥とも蝙蝠（こうもり）とも判らないようなものが、きい、きい、と鋭い鳴声をしながら、時おり鼻の前（さき）を掠（かす）めて通った。

　夜霧がひきちぎって投げられたように、ほの白くそこここに流れていた。車の轍（わだち）に傷めつけられた路は一条微赤（うすあか）い線をつけていた。その路は爪さきあがりに

なっていた。高い林の梢の上に微(かすか)な風の音がしていた。

路は小さな峰の上へ往った。路の上へ出ると元振はちょっと馬を控えた。黒い山の背がやはり前方(むこう)の空を支えていた。暗い谷間(たにあい)の方へ眼をやった時、蛍火のような一個(ひとつ)の微な微な光を見つけた。

「人家だ」

元振は眼を輝かした。人家ならどうにでも頼んで、一晩泊めて貰おうと思った。

馬は勾配の緩い路を静かにおりはじめた。今のさきまで人家のある処まで往こうと思って、それがために

気を張っていた少年は、人家を見つけると共に疲労を覚えてきた。彼は早くその家に往き着こうと思って馬を急がした。

　支那の里程で三里ばかり往ったところで、目的(めあて)にして往った明りがすぐ眼の前にきた。そして、人声は聞えないが何か酒宴(さかもり)でもしているように、室(へや)の中から華やかな燈火の光が漏れていた。

　元振は馬からおりて、それを門口の立木に繋いで門を入った。家の中はしんとして何の音も聞えなかった。元振は入口の戸を静に叩いた。応(へんじ)もなければ人の出てくる跫音(あしおと)も聞えない。で、今度は初めよりも強く力

を入れて叩いた。それでも中へ聞えないのか応がなかった。

「もし、もし、お願いいたします」

元振は声をかけてまた戸を叩いたが、依然として応がないので、彼は中へ入って声をかけるつもりで戸に手をかけてみた。戸はがたがたと軋りながら開いた。元振は中へ入った。明るい燈火がその室にも点いていたがやはり人はいなかった。

「もし、もし、すこしお願いいたしたいのですが」

元振は大声をした。それでも応もなければ人の出てきそうな気配もない。元振は首を傾げて考えたが意味

が判らなかった。

「何人(どなた)もいらっしゃらないのですか」

元振はまた言って暫く立っていたが、依然として応がなかった。元振はいつまでも立っている訳にゆかないので、思いきって上へあがった。

酒宴(さかもり)の準備(したく)をして数多(たくさん)の料理を卓の上へ並べた室が見えた。元振はその室の入口へ立って中を窺いた。そこにも人影がなかった。全体こうして酒宴の準備をしておいて、家内の者はどこへ往ったのだろう、ついすると次の室へ集まって、酒宴の前に何か話でもしているかも判らないと思った。彼はその室へ入らずに廊下

のような処を通って次の室へ往った。

力のない声で泣いている泣声が聞えた。元振はちょっと立ちどまって耳を傾げたが、中へ入って容子（ようす）を訊いてみようと思ったので、入口へ往って戸の隙から窺いた。十五六になる若い女が俯伏しになって泣いていた。

「もし、もし、すこしお願いいたします、私は旅の者ですが」

元振がこう言ったが、聞えないのか女は顔をあげなかった。元振は女を驚かしては気の毒だと思ったが、思い切って中へ入った。

女は顔をあげた。顔をあげて元振の方を一目見ると、さも怖ろしそうに顔に袖をあてて体を震わした。

「私は郭元振という者です、宿をとり損ねて日が暮れましたから、是非お宿を拝借しようと思って、門口から声をかけましたけれども、何人もいらっしゃらないから、失礼ですがあがってきました」

女は顔の袖を除けて元振の顔を見た。

「お見かけすると、隣の室に酒宴の準備をしてあるようですが、全体どういう事情で、貴女は泣いていらっしゃるのです」

「私は今晩、神様の人身御供になりますから、それが

悲しゅうございます」

元振は驚いた。

「人身御供、何という神の人身御供になります」

「この村に、烏将軍(うしょうぐん)という神様がございまして、毎年毎年、女を一人、人身御供にあげております、もし、それをあげないと、村に災難が起ります、私のお父さんは、五百貫の金が欲しさに、私を人身御供の女に売りました、酒宴もその神様にあげるものでございます」

「村の者は皆どうした」

「私をここへ置いてから、皆逃げて帰りました、どうぞ私を助けてくださいませ」

元振は腰の剣に心を向けた。

「よし、助けてやろう、どんな神か知らないが、人身御供を求めるような神は邪神だ、助けられなかったら、いっしょに死のう」

「どうか、助けてくださいませ」

「その邪神は、いつくる」

「夜半比(よなかごろ)にくるということでございます」

「では、運を天にまかして、邪神を待とう、心配しないで、ここに待っていなさるがいい」

元振は次の室へ往って料理の卓に向い、思うさまに喫(く)った後で、入口の室へ往って坐っていた。

夜半近くなって元振は入口の戸を開けて外の方を見た。二三本の炬火（たいまつ）を点（つ）けて供を伴（つ）れた牛車が来た。元振は邪神が来たと思ったので室の中へ入って待っていた。入口に数多（たくさん）な跫音がして、扉（と）を開けて紫の衣服（きもの）を着た怪しい者が入ってきた。

「相公（しょうこう）がいらっしゃる」

紫の衣服は外へ出て往った。引き違えて黄色な衣服を着た者が入ってきた。

「相公がいらっしゃる」

黄色な衣服を着た者もそう言って出て往った。元振

は相公と言えば大臣宰相だ、俺が将来で宰相にでもなるのかと思って喜んだ。元振の気が引きたってきた。

扉がまた開いて十人ぐらいの者が入ってきた。冠を着けた逞しい者がその中に交っていた。元振はそれが邪神の烏将軍だろうと思った。邪神らしい者は元振を見た。

「相公は、何故、ここにいらっしゃいます」

「今晩は、目出度い婚礼の酒宴があるということを路で聞いたから来た」

邪神は喜んだ。

「これはありがたい、では、席に着いて貰おう」

邪神の一行が酒宴の席へ入ったので元振は後から随いて往った。邪神は自個（じぶん）の前へ元振を招（よ）んだ。元振は考えついたことがあった。元振は邪神に向って言った。

「貴郎は、鹿の脯（ほしにく）をおあがりになりますか」

「鹿の肉は好きだが、この辺は鹿があまりいないから、喫（た）べられない」

元振は腰に付けていた糧食（べんとう）の鹿の脯を出した。

「これは、鹿の脯でございます」

元振は剣を抜いてその脯を一きれ切って左の手でさしだした。邪神は喜んで片手を出した。脯を載せた元振の手は邪神の手首に纏（まつ）わり着いた。邪神は驚いて手

を引こうとした。元振は剣を閃かして一刀の下に腕の付け根から切り落した。邪神は吼え叫んで逃げた。邪神に随いてきていた者も逃げてしまった。元振は邪神の手を持ったなりに剣を振り冠(かぶ)っていた。

切り取った邪神の手は毛の荒い野猪(いのしし)の腕であった。

朝、元振と女が話していると村の人が来た。村の人は女の死骸を収めにきたところであった。村の人は無事な女と元振を見て驚いた。その村の人の眼に野猪の片腕が見えた。

「村の鎮守様だ、神様の手を切るとは甚(ひど)いことをした

ものだ、どんな祟りがあるかも知れん、叩き殺して神様にお詫びをする」

村の人は口ぐちに怒りだした。

「人身御供をとるような神は邪神だ、天地に容れられない大罪だ、その道理が判らないとは、なさけない奴等だ」

村の人も元振の道理ある詞に怒りを収めた。村の人は元振を先頭に立てて、血の滴を随けて二十里ばかりも往った。

大きな塚穴があって前足の一方を切られた野猪が唸っていた。村の人は塚穴の口で火を焼いて煙をその

中へ入れた。野猪は苦しくなったのか外へ出てきた。待ち構えていた村の人はそれを仆(たお)した。

元振は助けた女を伴れて出発した。その元振は後に唐の宰相となった。

底本：「中国の怪談（一）」河出文庫、河出書房新社
　　　１９８７（昭和62）年５月６日初版発行
底本の親本：「支那怪談全集」桃源社
　　　１９７０（昭和45）年11月30日発行
入力：Hiroshi_O
校正：小林繁雄、門田裕志
２００３年９月17日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。